

年間第二十六主日

マルコ 9・38-43, 45, 47-48

2018.9.29.

高円寺教会 18:30 ミサ
クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

今日の福音には、「イエスの名を使って悪霊を追い出している人がいた」とあります。昔のエジプトの医者は、現代のような医学的理解がないので、呪い（まじない）をやって病気を癒そうとしたそうです。そのために神の名を使ったり、場合によってはユダヤ人の力ある人々、アブラハム、イサク、ヤコブなどの名前を使ったりしていたそうです。それと同じようなノリでイエスの名前を使っていた人がいたことが推測できます。イエスの弟子たちはそれをやめさせようとしたのですが、イエスは「やめさせてはならない」と弟子たちに言います。そんな弟子は自分たちの中で誰が一番偉いのかと議論していましたから、神様のみこころから離れてしまっている弟子たちも彼らと変わらないのではないか、とってしまいます。イエスはそんな弟子たちを見捨てたりはしませんでした。あなたたちがゆるされたように、あなたたちもゆるしなさい、というメッセージにも聞こえます。

今日の福音ではカットされてしまいましたが、「人は火によって塩味をつける」と書かれています。その火とは地獄の火のことです。地獄（ゲヘナ）というのは、エルサレムの陶片の門のすぐ近くにあるゴミ捨て場からきているそうです。エレミヤ 19・2 にあるベン・ヒノム（ヒノムの子ども）がゲヘナというギリシア語に訳された。イエスの時代にはその場所はエルサレムのゴミ捨て場になっていました。ゴミの腐敗によってガスが溜まり自然発生的に火が上がっていたと推測できます。その場所では、昔、神様を捨てたイスラエルの王様、アハズとかマナセなどが偶像に自分の子どもを焼いて捧げた場所でもあります。ですから、ゲヘナのイメージというのは、神の国とは逆のものとして描かれている場所ということになります。死んであの世に探さなくても、この世の中に地獄があるのだという話です。地獄というのは、神様から遠く離れている状態を意味します。神様の価値に反するようなあり方が行われている。暴力、差別、貧困、不正、そういったようなものが大きなレベルから小さいレベルまでこの

世に存在している。そんな中において人を生かす塩をわたしたちは持っている。この世の地獄の火の中で全ての人々は苦しみます。そして苦しんだ者、みじめな思いをした人こそ、火によってつけられた命を与える言葉を語る者となる。

この世の地獄から逃れて、桃源郷のような所に逃げるのではなく、この現実の中において、命を支えるために必要な塩味を豊かに含んだ言葉を語ることをわたしたちは求められています。

こんな世界の中で小さい者を大切に、自分の大切なものを犠牲にすることをいとわない人が、神の国をこの世にもたらす者となります。この世に地獄があっても、人は必ずこの世に神の国をもたらしすることができる。それはいつもキリスト信者とは限りません。「主よ、主よ」と言う者が神の国に入るのではなく、父のみ旨を行う者が入るのですから。この世の中で、病んだり、絶望することがあったとしても、失敗することがあったとしても、あきらめない限り地獄を神の国へと変えることができることを信じ、共に祈りましょう。